北海道
日伊協会会報

VOL. 63号　2020年4月
発行　北海道日伊協会
事務局　札幌市中央区南１条東２丁目
ブライトサッポロ内
電話(011)241-0345 FAX (011)241-0567

「沢山の仕事 北海道だからできました」

マリアンナさん　お別れサローネ

10 年余り北海道日伊協会のイタリア語教室講師として活躍し、札幌・北海道のイタリア語教育に尽力してきたマリアンナ・チェスパ理事が札幌を離れるのを前に１月 24 日の新春サローネで「私にとっての二つの故郷～Abruzzo と Hokkaido」と題して話しました。イタリア文化や日伊の体験について再三興味深く語ってくれたマリアンナさんのサローネも今回が最後になります。（出席者 32 人、会場：札幌丸井今井大通館 10 階「ミチノイエ」個室スペース）

「二つの故郷」を語る

マリアンナさんは、札幌在住の10年でたくさんのことをやり遂げました。サローネの冒頭で司会者は、①留学生として博士学位を取得②イタリア語講師として協会の教室、大学、文化センターなどで多数教育③北海道日伊協会の会員（2018年から理事）としてサローネの講演など活躍④イタリア語通訳・翻訳、在札文化人として、ミラノ博、古代ローマ展、カラヴァッジョ展など貴重な働き⑤自動車愛好家としてイタリアと北海道のクラシックカー・ラリーに参加―などをあげ、その人柄と献身ぶりを讃えました。北海道日伊協会が縁で人生の伴侶・保坂光一さんを得たのは、そのご褒美かもしれません。

感謝の花束を喜ぶマリアンナさん。贈呈者は乾藍那さん

この日のサローネで、マリアンナさんは、北海道とアブルッツォの対比を楽しみながら「多くのことを札幌にいたから、北海道日伊協会にいたから実現できた。東京にいたら埋没してしまったでしょう」と感慨深げに語りました。（2 面に続く）

NATSUKIさん急逝

ゴスペルシンガーとして活躍された北海道日伊協会メンバーNATSUKI（山田なつき）さんは３月１３日、容態が急変し逝去されました。ナツキボーカルスクールを主宰しこの数年は病と闘いながら、演奏活動やレッスン、奉仕活動に情熱を注いでいました。協会の事務局を㈱ブライトサッポロが引き受けるに当たって、強く支持しました。ミラノ博では北海道ブースのオープニングを「虹と雪のバラード」で飾りました。１月２５日の大阪での舞台を最後に、自宅で治療に努めていました。（追悼文３面に）

1ページから続く

二つの故郷ーアブルッツォと北海道

マリアンナさんは、自分で撮影した沢山の写真をスクリーンに映しながら話しました。

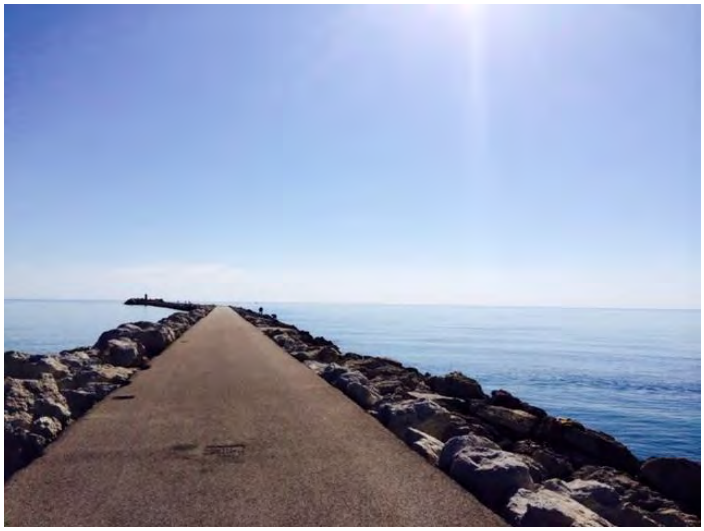
札幌への留学はまったくの偶然。日本語教師に勧められたから。札幌大学から北大大学院に進みました。

北大のことは知らなかった。秋、木々が紅葉する、イタリアにはない、美しい景色を初めて見ました。

5年間は大変でした。論文を書いているときにイライラする時がありましたが窓から風景を眺めたり、キャンパスを歩いたりすることでその気持ちが消えていました。

㊤の写真はオホーツク海に行き、流氷ウォークに参加して、これが私の頭にあった北海道だと記念撮影。

㊦はアブルッツォの港の防波堤。晴れているときの家族の散歩コース。いつもここで泳ぎました。今でも帰郷すると、ここで泳ぎます。



着物姿の花嫁

昨年9月9日、生まれ故郷オルトーナで結婚式を挙げたマリアンナ・チェスパさんと保坂光一さんは、2月22日に東京十社の一つに数えられる芝大神宮で、雅楽の演奏が流れる厳かな雰囲気の中、神前での式に臨みました。

新型コロナウィルスの影響で来日出来なかったイタリアのご両親とご家族に代わり、北海道日伊協会とロータリーのメンバーが札幌から参列、マリアンナさんの美しい和服姿の花嫁姿を前に、夫々が娘を嫁がせる親の気持ちに浸り涙腺が緩みました。続いて行われた都内ホテルでの披露宴で、二人は最高の笑顔でケーキ入刀、北海道から駆け付けた15人を含む90人が祝福しました。

保坂光一さん・マリアンナさん、どうぞ末永くお幸せに！（菅原明子）

訃報　相次ぐ　どうぞ安らかに

川端　昌子さん

2月24日にご逝去されました。享年87歳。長年にわたり当会へのご協力・ご支援をいただきました。

合唱のグループで、イタリアには十数回も旅行し、多くの会堂、聖堂で歌った中で、ピサの高い天井の聖堂にもっとも感激していました。

当協会には会員の田邉愛子さんの勧めで平成10年（1998年）入会。サローネや映画会には、「気持ちの若返りになる」と努めて参加されました。

写真はJTBのイベントでタレントのジローラモさんと

早坂　修一さん

法人会員ブライトサッポロ所属で、NATSUKIさんのパートナー早坂修一さんは、3月16日、心不全で急逝されました。なつきさんの告別式の当日でした。

ピアノ調律、音響技術が専門で、サローネCINEMA等でお世話になりました。

会報への寄稿は57号（2017年3月）の「調律師が読む『羊と鋼の森』」が最後になりました。

写真は大通公園でなつきさんとツーショット＝昨年10月

伊五輪チームの合宿も

全国日伊協会 コロナ前に連絡会２つ

全国日伊協会事務連絡会が去る２月３日、東京港区の日伊協会に東京、仙台、長野、新潟、宮崎、北海道の６協会が参加して開かれ、菅原明子理事が出席しました。

仙台・長野では、東京2020オリンピック参加のイタリアチームの事前合宿が予定されており、イタリア語への関心が高まっている事が語られました。東京からは、**オリジナルテキストの入門編『Per cominciare』**がリニューアルして刊行したので、他のレベルのテキストと共に利用を広げて貰いたい旨紹介がありました。

五輪イヤーとENIT 100周年へ　意欲的なイベントが語られたが・・・

翌２月４日は、駐日イタリア大使館（東京・三田）で、全国日伊協会関係者を集めた会議。この日は理事・事務局の山田晋筰・悦子夫妻も出席しました。2 回目となる今回のテーマは「経済」。ジョルジョ・スタラーチェ大使から、日伊交流の更なる促進に協力依頼を求めるメッセージ（**写真**）の後、イタリア貿易促進部・経済商務部の担当者からは、**2020年オリンピックイヤー**を特別な年としてイベントを予定しているとの報告がありました。

また、設立100周年を迎えたイタリア政府観光局ENITは、「**ラッファエッロ没後500周年**」「**フェッリーニ生誕100周年**」「**イタリア文化都市パルマ**」を掲げて、イタリアの魅力を発信する年にしたいと語りました。

「テルマエ・ロマエ」（ヤマザキマリ著）主人公ルシウスが登場する８本のコマーシャルビデオが制作され、都内各所で流されているとの事でした。

会議が行われた２月初めは、新型コロナウィルスの感染拡大は中国が中心の段階。その直後、全世界にパンデミック宣言も出され、いつ終わるとも知れない戦いを余儀なくされています。イタリアの惨状には言葉を失います。２月のあの日に描かれた希望溢れる未来が訪れると信じて、心静かに待ちたいと思います。（菅原明子）

Natsuki を想って

30 年来の友人　大滝　美恵子

3 月 13 日、私たちの愛するゴスペルシンガー、Natsuki が旅立ちました。

3 月 15 日。少し風の強い、静かな夕暮れでした。前夜祈祷会が行われるのは日本キリスト教会 札幌北一条教会。胡蝶蘭や百合が供えられた祭壇の中央には、いつものあの笑顔、ちょっとよそゆきの、本人お気に入りの一枚がありました。

薄桃色の棺の中に眠る Natsuki は、本当に綺麗でした。ゴージャスなステージ衣装をまとい、ピンク色のネイルをした両手を胸元に組み、いまにも歌い出しそうなほど。くっきりとしたアイメイク、唇や頬には紅を差し、大きな失意の中にありながらお母様が慈しみを込めて施されたお化粧に、彼女はとても満足していたのではないでしょうか。

「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。」

堤隆牧師が病床の Natsuki の元を訪れ、読んでくださった「ヨハネによる福音書」(14 章 1 節)です。

穏やかにその説教を聞いていた彼女は、「元気になったら何がしたいか?」という問いに、「愛する人と教会の礼拝に出たいです」と答えたそうです。そう、いつも、どんな時も隣にいてくれた、その愛する人の手を握りながら。堤牧師が語ったエピソードに参列者のすすり泣きは大きくなりましたが、それでも礼拝堂に立ち込めていた重苦しい悲しみの空気が少しだけ薄まったような、そんな気がしました。

3 月 16 日。たくさんのお悔やみ花が教会の入り口を埋め尽くし、礼拝堂は青白い朝の光で満たされ、祭壇の Natsuki は変わらず微笑んでいます。この後に及んでまだ現実を信じられない参列者の思いがそこここにありました。

午前 10 時。葬儀礼拝式は妹あすかさんのオルガンの調べで始まりました。響き渡る音色を聴きながら、そこにいる誰もが、幼い頃から共に育った姉を亡くした妹の、やりきれない胸の内に思いを馳せたはずです。

聖書朗読やお祈り、賛美歌など礼拝は流れるように進み、お父様の挨拶が始まりました。

その途中で知らされた、もうひとつの大きな悲しみ…。それは彼女の夫・早坂修一さんの訃報でした。

誰よりも近くで、表舞台に立つ彼女を支え、庇い、時には叱咤し、楽しいこともつらいことも分け合ってきた、最高のパートナーである修一さん。葬儀が始まるのを見届けてから旅立つなんて。最後までの完璧なマネージャーぶりに溢れる涙を拭うこともできないまま、力ない笑いが漏れました。ふたりとも、寂しくないね。これからもずっと一緒にいられるね。

コロナウィルスの脅威にさらされる中で行われた 2 日間の葬儀。ウィルス拡散を防止するため、礼拝での賛美歌は奏楽を聞くのみで、歌が歌われることはありませんでした。

でも、そんな中にあって耳にした 2 度の「アメイジング・グレイス」。

前夜祈祷会の始まりに流れた彼女自身の CD 音源の歌唱。澄んだ高音は天に届くほど伸びやかで、あまりにも美しすぎました。

そして、火葬場にて、彼女の恩師であるラニー・ラッカー氏が、愛弟子のために溢れる思いで歌って下さった１コーラス。

「主を賛美するために民は創造された。」

(詩篇 102 篇 19 節)

心を震わせた２つの歌声を、きっと忘れることはないでしょう。

(おおたき　みえこ)　横浜市出身。聖心女子大学卒。フードライター。パリに４年滞在し、フランス国家調理師免許取得。スイーツを得意分野とし、読売新聞などで記事を執筆、Ｊ-ＷＡＶＥでラジオコメンテーターを務める。

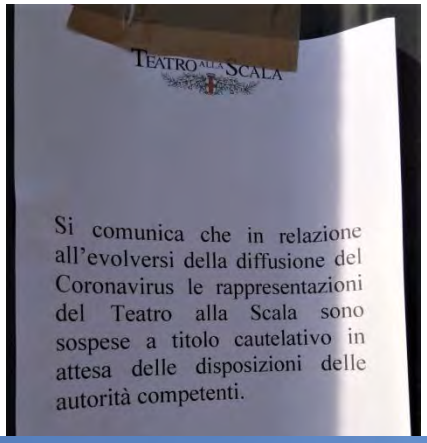
スカラ座の張り紙とアルノ川の空

コロナ感染のイタリアで

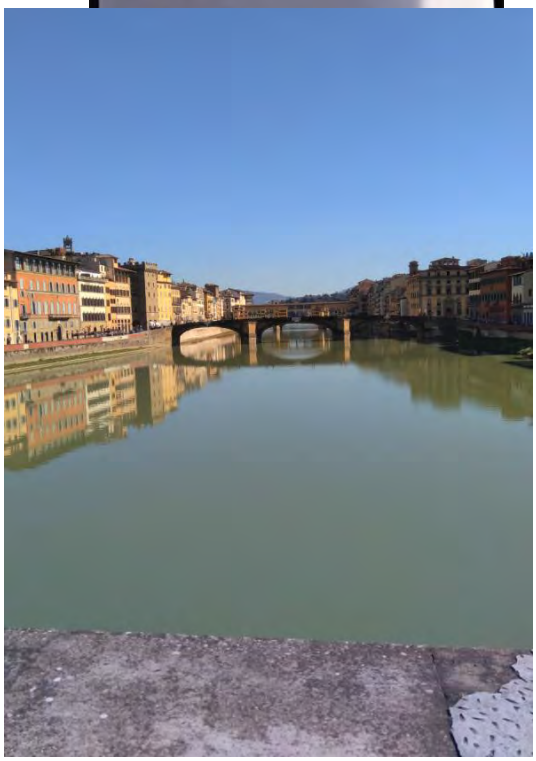
大橋 直紀

２月 23 日、私はミラノにいました。

１月上旬から３カ月間語学の勉強のためにフィレンツェに滞在する予定でいて、その日はスカラ座にオペラを見に行こうとミラノを訪れていました。通常歌劇場は30分も前になれば既に開場していて中に入れていますが、その日のスカラ座はなかなか開かず、入り口には人だかりができていました。開場 15 分前ほどになり、入り口の扉に紙（**写真**）が貼られ、喧騒とともにチケット売り場に人が殺到しました。演目中止のお知らせでした。



翌日フィレンツェの学校では、ミラノのあるロンバルディア州やヴェネト州などのいくつかの州で学校や映画館、美術館などの施設を閉鎖する措置が取られたことに伴い、該当地域を出入りした人の確認がなされましたが、街にはまだ多くの観光客や住民が闊歩していました。それから北イタリアの多くの州で外出規制が行われ、その後フィレンツェで公共施設や学校の閉鎖が伝えられたのは約 10 日後のことです。



3 月 11 日のアルノ川とポンテヴェッキオ

少人数ながらも多くの学びを得られたクラスや、食事に出たり観光に行ったり一緒に過ごした学校の友人たち、日本語を学ぶイタリア人の学生たちや、いつも心配して連絡をくれるご夫婦、たくさんの助言や気づきをくれる先輩方。「もう一回聞いてもいい？」と私が質問をしたときに誰一人嫌な顔をせずに説明をしてくれ、多くの素晴らしい人たちとの出会いに恵まれていると強く感じていました。

しかし、新型コロナウイルスが発生したころから少しずつ感じるようになった、知らない一部の少数の人からの、外国人である自分に対する突き刺さる視線や、そういった周囲への配慮から友人たちに何らかの負担をかけてしまうかもしれないと感じる自分自身への不安、そんな中でも変わらずに接してくれる人々に救われていたこと。新型コロナウイルスのもたらした私のフィレンツェでの生活には、その全てが混在していました。

周囲の人々からの強い後押しで私が急遽発った3月 11 日のフィレンツェは快晴で、奇しくもその日は自身と、現地でできた友人の誕生日でした。本来であれば、一緒に誕生日会をしようね、それから学校の最後のテストが終わるから、みんなでお疲れ様のフェスタをしようねと話していました。マスクをつける人が増え始めて異様な雰囲気を醸し出すフィレンツェで、アルノ川を渡る橋の上でやりきれない思いを抱えつつ見た雲一つないその日の空を、私は生涯忘れることはないと思いました。

時間が経つのは早いもので、この文を書いている 4 月 14 日時点で、私が帰国して既に１ヵ月が過ぎました。状況は世界的に悪化の一途を辿っています。多くの不安を乗り越えて一日も早く平穏な日々が戻ること、また多くの友人たちと笑顔で再会できることを願うばかりです。　（伊語講座受講生、声楽・バリトン）

私の「居場所」

エリーザ・イヴァナ・ペッリカノ

４月２日は、札幌に住み始めた記念日だ。長い旅のあとに北海道にたどり着いた瞬間は未だに記憶に鮮明で、もう２年間が立った実感がまるでない。

大学の入学手続きをする前に、北海道に住みたいという気持ちはそこまでなかった。もっとも、北海道大学を視野に入れてさえいなかった。当時は東京に住んでいて、首都圏が居心地よく、あまり移動したいと思っていなかった。東京の有名な大学の大学院生という肩書にも、少し憧れていた。

しかし同時に、プライベートでは困った状況にいた。２年間付き合っていた人が、お互いが忙しく、人生の転換期を迎えている最中に、北海道に就職することを決心した。これを当時の指導教員に打ち明けたら、「北海道大学もかなりいい大学だよ」と言われた。

先生が冗談半分で言ったことだったかもしれないが、文部科学省の奨学金に受かった通知が来た時に、北海道大学の先生にも連絡してみた。先生が早々と返事をしてくださり、日本にいる移住民と関連のある私の研究に関心を示してくださったのが、北海道大学に決めた理由だ。先生はイギリスの多文化社会やマイノリティーの表象を研究され、自分の生まれ育った日本で移住民がどのようにメディアの中で描かれているのかに以前から興味があったそう。博士課程でもっとも大事なのは、きちんと指導してくれる先生がいることだと思う。

札幌に慣れるのに、少し時間がかかった。札幌の４月は、私がなれていた４月と少し違う。イタリアの４月は暖かい。私の生まれ育ったミラノでは、若者が公園に行くことが多くあり、緑に囲まれて友達と時間を過ごす事が多い。18 歳の時にミラノを離れてからも、春は自然を楽しみながら友達とピクニックをしたりしていた。東京も、桜の季節の終わり頃で、緑がいっぱい。しかし札幌はまだ春が訪れていないかのようで、寂しい気持ちになった。

大学院生活も、慣れるのは難しかった。博士課程の学生は授業に行くよりも研究に専念するべきなので、最初はなかなか友達を作ることができなかった。その分、当時住んでいた寮の仲間たちに出会った。私が特に仲良くなったのは、オーストラリア、バルバドス、ドイツ、ケニア、ブラジル、インドから来ている子たちで、みんな来たばかりの頃はよく寮の談話室で集まって晩ごはんを食べていた。訪れたことのない国の話や、自分の学問と離れた研究の話を聞くきっかけができ、視野を広げることができただけではなく、彼女たちのおかげでスムーズに新しい環境に慣れることができたと思う。最近は研究室の同僚も増え、大学院にも打ち解けてきた。

木々の緑したたる北大キャンパス

振り返ってみると、この２年間を通して色々な出来ごとがあった。学会発表があったおかげでシンガポールに行くことができた。イタリアにいた時に決してできると思わなかった仕事―イタリア語講師―に携わることまでできた。そして、北海道で就職した彼と同棲することになり、先月入籍した。出逢った頃の夢を叶えた夫は今、中学校で英語の先生をしていて、教育に携わったことがなかった私に外国語の教育方法を教えてくれている。北海道に来て、想像もしなかった「居場所」を見つけた気がする。

（会員、伊語講座講師、北大博士課程）

新型コロナ 揺れる世界

パンデミックの足音は聞こえない。突然、目の前にいるのだ――イタリアからこんな声が伝えられた新型コロナウイルスのパンデミック（世界的流行）。世界の感染者は 4 月 21 日に 250 万人を超えた。世界が最も連帯を求められた時に、その実現を「自国ファースト」の主張と行動が邪魔をしている。混乱の中での闘いから見えてくるものは・・・

感染者 250 万人、死者 17 万人　「中国・武漢で原因不明の肺炎」―日本への第1報は1月８日の朝日新聞に掲載された。中国側が公式に感染を認めたのは 1 月 20 日だった。欧州での感染者初確認は1月 24 日。イタリアは 31 日に緊急事態を宣言したが、さらに北部を中心に患者が急増。初期段階でEUの「市民保護メカニズム」を通じてマスクなどの提供を求めた。独仏など大国は応えずにマスクの輸出を制限するなど自国優先の国境管理を強めた。米国が国家非常事態宣言を発したのは、感染者 2 千人を超えた 3 月 13 日だった。最大 500 億ドル（5 兆円超）の連邦予算を使える措置。その 10 日後あたりから感染者は急カーブで増え、世界最多になった。日本の非常事態宣言は 4 月 7 日。その後、医療機関や高齢者施設で集団感染が広がっている。

一方、台湾は昨年 12 月 31 日、「武漢の特殊肺炎の遠隔治療」情報をWHOに伝えたが、非加盟のためか取り上げられなかった。足並みはそろっていない。

なぜイタリアで急増　イタリアの人と人との距離が近い生活スタイルが感染を呼びやすいという。三世代同居が多く、同居でなくても頻繁に子供連れで訪れ祖父母と一緒に食事する。その時は、ハグやキスでべたべた。市民は広場に出かけ大好きなおしゃべりに興じる。公的医療が原則無料なので感染を疑う市民が病院に殺到し感染を広げた。集団感染に驚く 2 月下旬まで、全国の広場は右派ポピュリズムに対抗する若者たちが始めた「イワシ運動」の舞台だった。新型コロナは広場の場所を得た人々を消し去った。

世界計　感染者 256 万 7327 人　死者 17 万 7521 人

	感染者	死者		感染者	死者
米国	82万5306	4万5075	イラン	8万4802	5297
スペイン	20万4178	2万1282	中国	8万3864	4636
イタリア	18万3957	2万4648	ロシア	5万2763	456
フランス	15万9300	2万 829	ブラジル	4万3368	2761
ドイツ	14万8453	5086	ベルギー	4万 956	5998
英国	13万 184	1万7378	カナダ	3万9405	1915
トルコ	9万5591	2259	オランダ	3万4318	3929

日本　感染者 1 万 14946　死者 277　　（4 月 22 日現在）。

芸術は生存に不可欠　殆どの国で文化施設がイベント中止あるいは延期に追い込まれている。俳優や演奏者、裏方のスタッフなどフリーランサーはたちまち生活に窮し、長引けば劇団など運営団体の倒産につながる。ドイツ政府は早々と「芸術は生存に不可欠」と宣言して、申請の 2 日後には 1 人最大9千ユーロ（105 万円）の現金が振り込まれる支援を開始した。各国が文化支援に乗り出す中で、注目は韓国の文化バウチャー制。低所得層を対象に公演・展示・映画・観光などの分野で使用出来るバウチャーを年間 8 千円相当支給する。「文化享受」格差の解消をはかりながら文化産業を支える（岸正人、朝日新聞　4 月 16 日「視点」）。再開できる見通しはないが、コロナ感染が終息に向かう時、観客や利用者を取り戻すためのヒントになるかもしれない。

協賛企業のお　店

宮田屋珈琲大通店オープン

大通西 3 丁目北洋ビル B2F

昨年 11 月 27 日初めて札幌市の中心部に出店しました。これで大麻店を含めて 10 店。リンゴ倉庫などを改装して大型店を展開し、北海道新聞にも「我が街元気企業」と紹介されました。古い知り合いの宮田社長は「コーヒー一杯の値段も抑えめ、コーヒー大福、ボリュームあるサンドウイッチ、コーヒーチョコレートなど商品も多彩です。是非お試し下さい」と招きます。社会福祉法人“ともに福祉会”と共同カフェも運営しています。　（理事　米倉紘一）

人生！音楽の旅 ㉖

三部　安紀子

新型コロナと劇場

生存に必要不可欠なもの

東日本大震災の３・11 から９年もの年月が流れたが、復興の道はまだまだ遠い。原発被災地の恐怖に震え上がったあの日！思い出すほどに胸に突き刺さる出来事。

そしてこの新型コロナウイルスの猛威は全世界を巻き込み、感染者 170 万人、死者 10 万人を超え、国際間の人の行き来も遮断してしまっている。ある意味で第二次世界大戦以上の危機と言えるかもしれない。

いつになったら終息か、見通せない不安と恐怖の日々の連続は、人々の身も心も痛めつける。ある友人がこんな事を言っていた。「今まで贅沢に満ち足りた、幸せな生活していた人間たちに、少し痛い目に合う試練を神は与えた」・・・と。そう思うと只々この時期を耐え忍ばなければならない。

先日、東京の演出家の巨匠・栗山昌良先生から「君！9 年前の３・11 の時、本番の公演をよく頑張って可能にしたね、凄い勇気だったと思う」と電話をいただいた。その度胸を褒めて下さったようである。この連載の 12 回目（45 号）に３・11 の事を記したのだが、再び思い出してみたい。

2011 年の３月 11 日は、北海道二期会にとって、オペラ「愛の妙薬」公演を翌日に控えたＧＰ（ゲネプロ、総舞台稽古）の日、本番同様の舞台上にいた。オーケストラもスタンバイ。そこに大震災が飛び込んできた。午後 2 時 46 分、教育文化会館も大きく揺れた。直ぐに東京から連絡はいり、「こちらは劇場の殆どがクローズするが北海道二期会はどうするのか。予定通り公演するのか！」

兎に角会場の教文は被害がないので札幌交響楽団と直ぐに相談。私達は公演したいと話すと、札響もここはやらなければとＯＫ。涙が出るほど心強かった。

流れてくるのは残酷なニュースばかり。一夜明けて本番。ソリスト達は声が出るか？お客様方は来場していただけるか？数々の不安と心配を抱えての開演。お客様は全員来場、とても喜んでいただき、２日間の公演を成功裏に終えることができた。音楽の無限の力を信じた判断は間違っていなかった。

この時の演出家が栗山昌良先生。

あの感動は一生忘れられない。観客から「素敵なひとときを有難う！」「感動した。来てよかった！」とお礼を言われた。芸術が人を助けることをしみじみと心から感じた。

今、芸術を求めて人々が集う劇場は、感染のクラスターとなる主要な場の一つとして、すべての公演は中止（延期）となっている。公演が成り立たなければ、関係者はたちまち生活に窮する。二期会メンバーらが次々に相談に来る。どうやって先の見えない難局をしのぐのか。

思わず拍手したニュースがある。「アーティストは必要不可欠であるだけでなく、生命維持に必要なのだ」「クリエイティブな人々のクリエイティブな勇気は危機を克服するのに役立つ」。メルケル首相（**写真**）のドイツ政府はこう断言し、フリーランサーや芸術家、個人事業者（約 300 万人。半数が文化セクターで働くという）を本気で支援する最大 500 億ユーロ（約５兆 9500 億円）の財政パッケージを含む新型コロナウイルス影響緩和策を提案し、連邦議会で承認された（3 月 25 日）。この規模は札幌市の一般会計予算の 5 倍強。知人の娘さんでベルリン在住の音楽家は、申請したところ 2 日後に 5 千ユーロ（約 60 万円）が口座に振り込まれたと驚き、喜んでいた。

芸術文化こそ人々に生きる喜びと感動、安らぎをもたらす最大の社会資産と思う。

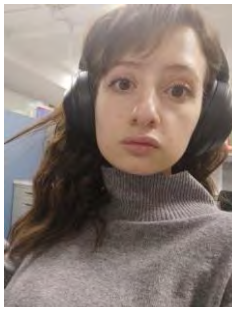
このような言葉と政策が、支援規模はさておいても、日本の政府から聞こえてこないことを寂しく思う。

今回のコロナウイルスとの戦いの中でこそ、人々の為に少しでも安らぎ癒しを持ってもらう為に音楽活動したいと心から思うのだが、その日がいつ訪れるか。辛抱強く待ち構えている私達である。（4 月 10 日記）

（会長、北海道二期会理事長、みべ音楽院長）

イタリア語　スカイプレッスン開講

北海道日伊協会のイタリア語教室では、講師と受講生がパソコンを通じて向き合うオンラインの「スカイプレッスン」を開講しました。
残業でレッスンの開始に間に合わない、遠方で通う事が難しいなど、みな様のそれぞれ事情に応じてイタリア語を学んでいただくためです。



お好きな場所　ご都合の良い時間に

コロナウィルスの感染拡大で外出自粛が求められているなか、期限付きの利用もＯＫです。講師・事務局協力してご希望に柔軟に対応します。

講師には松浦茂さん、片桐亜子さんに、新任のエリーザ・ペッリカノさん（**左**、北大博士課程）が加わります。惜しまれながら北海道を離れた人気講師マリアンナ・チェスパさん(**右**)も引き続きスカイプレッスンを担当します。

受講料は 1 万 1000 円（1 時間、4 回）

最近のサローネ CINEMA

キノ特別編　第３回

■**「トスカーナの幸せレシピ」**1 月 16 日(金)　シアターキノ

終始爆笑のコメディではなく、最後は「ポピュリズム」の恐ろしさに警鐘を鳴らすような、痛いところを突いた映画でした。

みべ音楽院主催のレッスンの為に来日中のイタリア人ピアニストの Maurizio Colacicchi 氏が三部会長に同行し、安田琢さんもたまたま札幌に来ていたからと参加、いつもとは違った雰囲気。鑑賞後の懇親会（写真、琢さんは直前に退席）は 40 分程和やかな話し合いが続きました。　（菅原明子）

サローネ CINEMA 次回作決定

亀井コレクションから

激しい季節

第 2 次大戦下の北イタリアの高級避暑地を舞台に、明日の運命もわからぬ中で燃え上がる青年と未亡人の恋。円熟のエレオノラ・ロッシ＝ドラゴとジャン＝ルイ・トラティニャンの 2 大スターが白熱の演技。1959 年、伊仏合作。
監督：ヴァレリオ・ズルリーニ

会場:みべ音楽院
可能な日を待って開催

編集後記　例年より早かったはずの春が、新型コロナに沈黙させられている。「どうぞいらっしゃい」と広げるはずの両手を膝に「入るのを控えていただきたい」と訴える知事たち。人が集まるところから新しいものが産まれてきた。多くの仕事、企画が禁じられ、さて、命をはじめ多くを失い、得るものはあるだろうか。会報のこの号には、実現されたはずの夢とあきらめを拒否する今があります。（彦）